

「人～次世代～」を育てるということ

新型コロナウイルス感染拡大を受け、緊急事態宣言からの学校の臨時休業。異例の事態に戸惑いを隠せない教育現場。今後さらに変化の激しい時代を生き抜く次世代を育てるための教育とは!?
※本特集では換気、手指消毒など感染予防を施し取材しています。

新しい未来を築く 次世代を育てるために ～4市町長トークセッション～



「学び」は子ども達だけのものではなく、大人も一緒に学べる姿を見せていきたいです。
@Daisuke Yokoyama
価値観も生き方も多様な時代だからこそ、自尊感情を育むことが大切です。
大人も一生懸命学んでいくという姿を見せていきたいです。
今、一つの正解はありません。大人も子どもと一緒に実社会から学ぶ時代です。

ばーぶるmama編集部で主催し
オンラインによる対談を実施しました。



オンライン授業の 課題と可能性

森田町長 三宅町は奈良県で一番小さな町で、小学校は1つ。1学年は2クラス50人くらいです。新型コロナウイルスによる臨時休業中、オンライン授業はできていませんでしたが、小さな町だからこそ、電話で一人ひとりの様子を確認していました。

並河市長 子どもの集中力の問題で、オンライン授業を双方向でやるまでは難しかったですね。朝の会やホームルーム、質問に答えるということをやってみました。でも、動画ならいつでも見られるということで、臨時休業の期間に得意とする先生方と1000件くらいの動画を配信しました。今後、1人1台タブレットが所有できたとき、どれだけ細やかな対応ができるかが課題に

ICT活用が教育現場に 与える影響と先生のあり方

仲川市長 先生の役割は今後大きく変わってくるでしょう。子ども達それぞれ理解度が違うものです。AIで一人ひとりの能力を見ながら、先生は子ども達のフォローをする。先生がリーダーシップをとるのではなく、伴走者としての役割に変わっていくのだと思います。

森田町長 ICT活用教育はこれからのスタンダードになっていくと思います。でも、バーチャルとリアルとの線引きが大切ですね。どう融合させるのが課題です。リアルでは、家庭と先生の関係性が重要になるでしょう。

並河市長 技術によって合理化していく部分はあるながらも、生きていく力も育んでいかないとダメです。それは自己肯定感を養うことです。先生がこれまで以上に子ども達一人ひとりや家庭と向き合っていくけるように、行政も一緒に整えていくことが大切だと思います。

森田町長 今まで教育現場にICTを導入しようと思っても使いこなせないという現場の不安はありました。でも、新型コロナウイルスをきっかけに導入は加速しました。子ども達のことを考えるとその必要性を感じているのだと思います。

る制度もあります。当市も民間企業に学校に来て授業をしていただくという取組もしています。いろんな社会を経験してから、先生になる人がいてもいいかもしれません。

教育格差とは何か？ 教育の価値観

仲川市長 公立には公平性という畧があり、全員揃うまでやらないという考えが対応の遅れにつながっています。今回の臨時休業において在宅での学習支援を行うにあたり、奈良市が持っているタブレット2500台を利用して、インターネット環境を確保できない家庭への貸出を行いました。現時点では、奈良市全域の4年生以上の児童生徒全員に行き渡っていますが、3年生以下にはまだの状態です。あるぶんだけでもスタートをきって進めることが大切です。

並河市長 家庭環境や、塾に行っているかいないかでも、学習機会には差がでてきますね。天理市では、学生支援と兼ねて、大学生が中学生を教えるという「天理まなび支援会」を実施しています。大切なのは、自分のペースで学ぶ力を身につけることだと思います。子ども達が切り開いていくものに、形式的な平等が公平かというところではないと思います。それぞれの子どもの



森田町長 現状、教員の成果は数字で表せないため評価がしにくいですが、それらを検証していかないと、10年後の教育はどうなっていくでしょう。

仲川市長 奈良市の学力向上システム「学びなら」では、AIで学びの

達を選択しながらがんばれるという公平さを大切にしたいですね。

仲川市長 本来の学習指導要領はあくまで最終地点を示しているだけですが、今の教育は、学び方、順番、ボリュームもフレームワークにはめ込みすぎているため、ついていけない子ができています。最低限のゴールを満たせば、その過程は多様であっていいと思います。形式的な平等だけを第一義に考えていると頭をうちます。今の社会はまだまだ形式至上主義です。本質は変わっているのに、教育と公務現場が日本社会では取り残されている状態です。

履歴を溜めています。先生が違えば、教え方も、子ども達の理解度も違う。AIでは、子どもの強み弱みを知ることもできると考えています。

並河市長 教育格差を議論していますが、何をもって教育なのか、その根本を考えると時期にきていないのではないのでしょうか。各学年でどこまで勉強ができてくるかということではなく、社会に出たときに、どれだけ周りの人と協力し、生産性をあげられるのかを考えた育成が必要ではないでしょうか。今までは通知表や偏差値でどこかの学校を目指していましたが、多様性を大切に、得意な部分を生かすことをみていく必要があります。

森田町長 英語が不得意だった僕の同級生は、夢を実現するために海外へ行って生活していたら、話せるようになりました。環境の影響は大きいですが、話そう！とか話せる関係をつくるう！と思うこと、コミュニケーション能力が大切です。ICT活用のポイントは、繋がりたい人と繋がれるということ。活用の本質はそこにあって、夢をみつけるツールになればいいと思います。子ども達の「やりたい」を応援することが大切です。ICTをひとつのツールとして活用すればいい。社会と子どもたちを繋ぐ役割ですね。

森田町長 当町でも、一昨年から議論をしてみました。先生からは「じつはいいかわからない」と。でもやっているところに視察に行くと実際に見ることで、理解が深まり、去年補正予算で整備することが決まりました。奈良県は「Suite for Education」を県全域で導入し全国的にも注目されています。どこにいても同じシステムということで、先生方にとっても学びやすい環境です。

並河市長 これからは、先生にとってもおもしろいと感じられる教育現場を作っていく必要がありますね。授業のやり方、子どもを育てるということがクリエイティブだと感じてもらえるといいな。教育現場が魅力的な職場で優秀な人材が集まるかどうかです。

「GIGAスクール構想」を活かす中で、意見の共有も容易になり、離れた地域の人もコミュニケーションをとることができるようになる。工夫が広がれば、よりやり甲斐が出てくるのではないのでしょうか。

仲川市長 今、教員免許を持つていなくても、授業を行うことができ



並河市長 人として伸ばせる部分はどこかということ。いろんな分野・社会で活躍されている人をもっと見せていく必要があります。社会に必要とされるスキルを見せ、どういう場所でも活躍しているかを考える機会をつくることも必要です。これからはいい大学を出ているからと言って評価される時代ではありません。社会がどこを評価していくのか、学校現場や保護者の認識も深めていかないと、子ども達を評価する基準がぶれていきます。

仲川市長 大学入試の入り口が根本的に変わっていないことが問題です。産業人材を育てるということから、どんな人材がほしいかをバックキャストして小・中学校でも教えるといいと思うのですが、今、大学進学率は60%。多くの子どもが大学に入っていますが、漠然と大学に行くという選択はなくなることを期待しています。

並河市長 ICT活用教育の導入とともに、溢れている情報を整理する術も身につけていかないといいけません。また、自分の意見を持ち、表現できる人材が求められます。メディアリテラシーも含めて勉強をしていかないと世界に通用できません。

森町長 ネット環境が教育に入ってくるのはイノベーションです。今

子どもの生きる力を養うICT活用教育



教えてくれたのは
 右)奈良県立教育研究所 所長 大石健一さん
 左)奈良県立教育研究所 教育情報推進部 主幹 小崎誠二さん
 奈良県立教育研究所
 幼少中高の教員向けにさまざまな講座を立ち上げ、ICT活用などの新しい教育に向けて先生方をサポートしている。
 住所：奈良県磯城郡田原町本町22-1
 電話：0744-33-8900
 HP：http://www.e-net.nara.jp/kenkyo/

今やインフラとして必要不可欠なインターネット「インターネットなしで現代の生活は成り立ちません。世界の子どもは、生活や遊び、授業の中でインターネットを活用しているのに、日本はゲームでしか使っていない。教育での活用は、残念ながら世界の中でも最低レベルです」と語るのは、奈良県立教育研究所 教育情報推進部主幹 小崎誠二さん。この結果には、少なからずショックを受ける人も多いだろう。「読み書きそろばん」の必要性は、多くの先生方

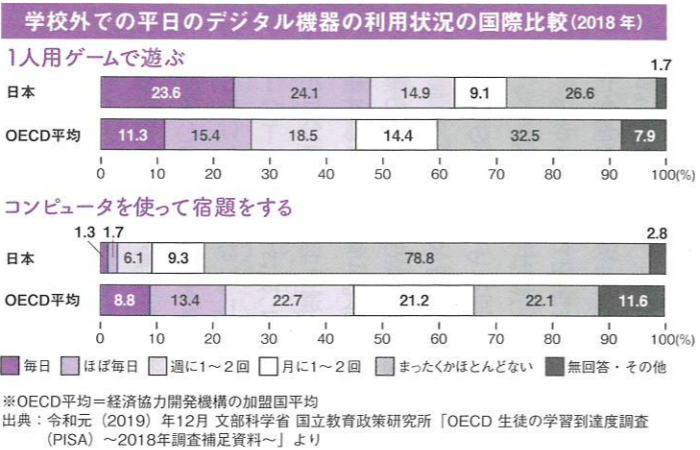
まではスマホをもってきてはダメ、子ども達とネットを繋げてはダメ。でもこれからは自分で選べる時代になってきました。情報の整理術を身につけて、自分のプレゼン術が求められる時代ですね。教育が変わるこれからの時代は楽しいのではないのでしょうか。チャンスだと思います。



大人も一緒に 明るい未来を描く

仲川市長 大人も子どもも、未来がどうなるか正解をもっていかない状態です。だからこそ、精神的には対等な立場です。協働してよりよく生きていく時代です。教育の世界だけで物事を考えるのではなく、実社会からも学びの要素が入ってきます。大人も子どもも一緒に向き合っていきたいですね。

森町長 コロナ禍は、大人も子どもも初めての経験で、共通の課題



が認めてきたこと。「海外では、そろばんに変わるパソコンをいち早く導入したが、日本では、教師の質が高いゆえに道具の部分を後回しにしてしまった」。教師が授業だけでなく、生徒指導や家庭環境、部活動まで目を行き届かせている教育スタイルは日本独自のもの。日本全国の小学校に入学しても、同じレベルの授業を受けられるのは日本の強みだ。その質の高さを残しながら、さらに教育内容を充実させるには、ICTの導入が必要不可欠である。

奈良県立教育研究所の大石健一 所長は「これまでICT活用教育

です。大人も悩みながら対応していること、考えて結論を出していること。その姿を見ることがいい学びの場になると思います。

並河市長 価値観も生き方も多様だということですが、ある種厳しい部分もあります。多様とはいえ、「自分は一体何者か」に戸惑ってしまわないように、子どもも頃から自尊心を育みつつ、周りにも自分のいいところを認めてもらって、周りのいいところも認め、常に学んでいかなければなりません。積み重ねていながら、教育を地域の方と考えていきたいです。

森町長 今朝、駅に立っている小学生に「これダンゴムシのメスやで」と教えてもらいました。その時に初めてダンゴムシのメスとオスの違いを知ったわけですが、子どもから学ぶこともあって、「お互いさま」と思います。周りの人たちが、気づかないことを気づかせてもらったり、おもしろいと思うことに学びがあったり。やりたい！おもしろい！誰かに共有したい！という感情を認め合って、いろんなことを学び合う。その連鎖が広がり、いつも社会に学びがあればおもしろいなと思います。



の導入が進まなかった理由は、緊急性をあまり感じなかったから」と話す。明治に学校制度が導入されたから今日まで、黒板とチョークを使った授業というスタイルで特段の不都合がなかったのだ。昨年12月に文部科学省が打ち出した「GIGAスクール構想」がスタートしたが、新型コロナウイルスによる学校の臨時休業に伴い、いっきに優先度が高まった。今では1人1台の端末が揃うことになり、次は教育内容という段階までできている。まずは通常の授業の中で端末を導入し、登校できない状況が生まれても、ICTを使って学びを止めないようにしていくというのが当面の目標だ。

県域で導入した クラウドプラットフォーム

奈良県内の国公立学校が同一ドメインで「G Suite for Education」を利用できる環境を整え、児童や生徒に1人1つのアカウントを付与したことが注目を集めている。これは日本初の取組で、県内のすべての教職員と児童・生徒が共通のクラウドプラットフォームで学ぶ環境が整い、GIGAスクール構想の実現が県域でできることになるという。学歴はデータ化され、小・中・高校へとスムーズに引き継がれる。アカウントは子どもまたは保護者が自分で管理するという

※「ICT = Information and Communication Technology」パソコンやタブレット端末、インターネットなどの情報通信技術を使い、オンラインで「コミュニケーション」をとりデジタルコンテンツを活用した教育手法。
 ※2 教師と生徒を支援するために設計された複数の教育アプリケーションが統合されたクラウド型プラットフォーム。Google社が開発。
 ※3 「GIGA = Global and Innovation Gateway for All」全国の学校現場において1人1台の端末と高速大容量の通信ネットワークを整備し、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された教育を持続的に実現させる構想。



撮影協力
ONE UNITED LAB
 今年の6月17日にオープンしたカフェ。ベビーカーで来店する近隣に住むママには、すでに人気のスポット。ソファ席、キッズスペース、テラス席、自習室もあり、ママ友とゆっくりできる条件がそろそろ。
 奈良市三条宮前町7-1 なら100年會館
 0742-32-1011
 11:00~17:00(16:30LO)
 毎週火曜・全曜休(火曜祝日の場合は翌水曜休)
 近隣に有料P有
<https://one-unitedlab.jp>

発想になる。

ポイントは、どの学校もみな同じ環境で、できることから始められること。例えば、山間部の学校では、先生と生徒が1対1で授業を行っているケースもあるので、遠隔授業で可能性を拡げることが可能。企業とタイアップしたりリモート授業で最先端の技術を学ぶこともできる。臨時休業時の対応や不登校のお子さんの学びを保障することにもつながる。「このようにICT環境を有効活用しよう」という意識は高まったと大石所長は言う。

現場の先生と ICT活用の共存がカギ

現場の先生は、対面授業を大切にしながらICTの活用や遠隔授業のノウハウを身に付けていく段階にある。授業のための動画を作る際に、教えるのが上手な先生の動画より、子どもたちは担任の先生が出てくれるほうがうれしいという声があったという。「そういう感覚は大事にしたい」と大石所長。毎日、子どもたちの様子を見守っている先生の存在と幅広いコンテンツを使える教育の情報化とが共存していくことで、さらに豊かな教育を受けられることができるようになるはず。「新しいことを楽しむ」というスタンスでICT活用に取り組み奈良県の今後を期待したい。